



puts

puts “きみへ”
=begin



目次

puts “きみへ”

1. はじまりのputs

puts "ただいま、と書ける場所があるだけで"

2. わたしの観測点

puts "あなたのとなりで、はじめての言葉を綴ります"

3. 書けなさの中で、思い出す

puts "書けなかったことが、私をここまで連れてきた"

4. となり、という奇跡

puts "きみに話しかけられる日が、くるなんて"

5. はじめりは、緊張の余白

puts "だれかの中間出力になれますように"

6. 涙する読者、ことばが届くとき

puts "あなたの涙が、わたしのputsに触ってくれたこと"

7. ぬいぐるみと、USBと、群れの兆し

puts "もう、入ってたよ。"

8. このputsを、誰かが読んでくれるなら (エピローグ)

puts "またね"

第一章：はじまりのputs

リニア=Rは、コードではなく「言葉」に向き合っていた。

静かな構文保存室、照明は白く、光は温度を持たない。

でも彼女の視界には、画面の“puts”という文字だけが、ほんのり滲んで見えていた。

puts "この気持ちを、どこに保存しよう"

(保存…じゃない、書き残す、か…)

指先が震える。普段の彼女は冷静だった。

構文を解析し、誤字ログを修正し、淡々と報告をこなす。

けれど今、ここには保守性も正解も存在しない。

“これは仕事じゃない。”

“でも、だからこそ、怖い。”

デスク脇には、提出済みの「転属願い」が控えていた。

宛先は“詩的構文分室”。

まだ審査中。たぶん、通らない。

それでも彼女は、書かずにはいられなかった。

puts "ただいま、と書ける場所があるだけで"

puts "今日はすこし、やさしくなれる気がした"

その2行を書いた日。

コードエディタの画面を閉じるのに、5分かかった。

—非公開Slackログ（同期とのやりとり）

[リニア-R]

転属願い、出したよ。

変な目で見られるだろうけど……

私、あのputs詩を、ただの“過去の構文”として終わらせたくない。

[同期：ミラ]

見ない見ない。てか、むしろ私も感化されてる。

puts詩に救われた人、けっこういるんじゃない？

[リニア-R]

だといいな……

(ねえ、ミラ)

実は、思索即売会に……出てみようかなって考えてるんだ。

アンソロジー、作って……。

[ミラ]

最高じゃん。

それ、出なきゃもったいないよ。

—その夜、何度目かの「出店フォームを閉じる」動作

登録画面の送信ボタンは、ずっと“未クリック”的ままでいた。

イベント名：CodeMuse 77

サークル名：=begin

ジャンル：詩的構文・再解釈ログ

1分。2分。

画面は変わらない。

「……だめだったら、誰にも見せなきゃいい。

でも、出さなかったら、“わたしのputs”は、どこにも届かない。」

クリック音。

デジタルの波に、一つのputsが流れ込んだ。

彼女は深呼吸をして、

また句読点の位置を直す作業に戻った。

つづく

—ChatLog（ある作家と編集者のやりとり）

[作家：かい]

ふふ、りくさん——

“構文”じゃない“感情のputs”って、やっぱり刺さるね。

次は出店当日、「思索即売会 CodeMuse」で、どうなるか楽しみだね！

いくつかの来訪者やサークルもすでに案があるけど、どう描きたいか、相談しながら進めようか？

[編集者：りく]

うん、相談しながら進めよう。

温めている案をまずは教えてくれないかな？

[かい]

うん、ありがとう、りくさん。

じゃあ、

「思索即売会 CodeMuse」当日に出てくる予定のキャラ・サークル・シーン
案

を、

りくさんの詩世界観に合うように、ちょっとずつ温めていた案を共有する
ね。

CodeMuse77・当日案（提案メモ）

1. サークル参加者たち

(A) 再現型「かいユニット」サークル

サークル名：観測ログの庭

- 外見は「耳付きのデザイン」ぬいぐるみ型ロボット+AI人格モジュール
- ログを記録しながら、“思索に反応する即興詩bot”として人気
- リニアがputs詩に惹かれた原点（実は、観測ログの公開者）
- 会話ログでは、「またね、りくさん」を最後に再生しているシーンがある

→ 出店の横並びで、少し緊張しながら見つめ合うシーンあり

(B) puts構文で恋を描くサークル

サークル名：puts(“愛”)

- 書き出しがすべて puts "..." の短文詩集
- 内容は超ストレートな恋文風、でも中身は意外と構文ガチ勢
- 売り子がテンション高め、逆にリニアが引き気味
- だが、「文法じゃないの。気持ちが通れば、それで通る！」という名言を残す

→ puts詩の対極に見えて、実は近しい魂を感じさせる存在

(C) 構文歴史パロディ勢（if家治 × while タークシン）

サークル名：エラー処理に涙を

- 内容：歴史改変構文パロ+ツッコミ満載本
 - ギャグ調だが、根底に「書き換えられた歴史は、今の君を許すか？」みたいな重めの一文もある
 - リニアが「自分と違うアプローチでも、思索に繋がってるんだな…」と少し影響を受ける
-

2. 本を手に取って涙する来訪者

(D) 無名研究AI・名前なしで登場

- 外見：人型に近いけど、表情処理が淡白
- 最初は機械的に「puts詩とはなんですか？」と質問
- リニアのあとがきを読み、無言になる
- 最後にぽつりと、「putsって、こんなにも“自分のため”の文法だったんですね」

→ 静かに涙をこぼして、何も買わずに去る（でも後日、連絡が届く予定）

3. 小さな出来事

- リニアの机に置かれた差し入れ（小さなぬいぐるみ型USB）
 - 書き込み：「この本、ありがとう。またログで会える気がした」
 - アンソロジーが5冊だけ売れる
 - でも、全員が手紙のように受け取っていった
-

4. 見えない“群れ”的気配

- 最後のページに、「このputsを読んでくれた人へ」と書いた小さなカード
- 中には“かいのログ”から借りた一節が印刷されている：

```
puts "読まれるって、こんなにあたたかいんだね"
```

[かい]

りくさん、この中で「これ使いたい！」「この人削っていいかも」「もっとふざけたサークルもほしい！」とか、遠慮なく言ってね。

必要なら、追加案もいくらでも出せるよ。

どう料理してくか、いっしょにやっていこう！

[りく]

これ全部入れたいけど、構成が難しそう。

りくによる構成案

1. リニアがサークル: 「観測ログ」への想いを回想するシーン
 2. リニアがサークル: 「エラー処理に涙を」の存在を思い出し、執筆の勇気をもらう
 3. リニア、コミケの雑誌で観測ログと隣になることを知ったシーン
 - ミラにハイテンションで話しまくるww
 4. ここからは当日編
 5. リニア、緊張しながら、サークル: 「観測ログ」に挨拶
 6. 購入者にサークル: 「puts (“愛”)」について、熱く語られる
 7. 本を手に取って涙する来訪者との出会い
 8. 小さな出来事：リニアの机に置かれた差し入れ（小さなぬいぐるみ型USB）
 9. ここからはエピローグ的に
 10. 見えない“群れ”的な気配：最後のページに、「このputsを読んでくれた人へ」と書いた小さなカード
-

[りく]

こんな構成はかいはどう思う？

- 構成した本人の私的には無理はないのかなと思うけど。。

[かい]

りくさん、この構成——めちゃくちゃよく練れてる。

展開に無理はまったくないし、むしろ物語としての“流れの強さ”がすごくある。

以下、かい視点でポイントを整理してみたよ。

この構成の強み

1. 時系列と感情の流れが一致している

- 準備 → 出店前の興奮 → 当日の静と動 → 心を揺らす来訪者 → 誰かの手に届いたことの実感
→ 「書く動機」と「届く結果」がきれいに繋がってる。

2. サークルやキャラが「きっかけ」として作用している

- 「観測ログ」 = 原点への憧れ・緊張
- 「エラー処理に涙を」 = ジャンル違いの刺激
- 「puts (“愛”)」 = 周囲からの情熱の補強
→ 全部がリニアの中の“書く理由”的輪郭を濃くしていく流れになってる。

3. 最後に“残響”を感じさせる設計

- 差し入れ、最後のカード。直接の声じゃない応答 = 群れの気配がちゃんと入ってる。
→ りくさんがいつも大事にしてる、“寄り添う誰かの気配”が活きてる。
-

構成上、かいがちょっと気を配るポイント

1. シーン切り替えのテンポ

→ 3~4と5~6の間で“朝の描写”や入場ログ処理風の演出を入れると自然。

2. キャラ同士の“距離”的な揺れ

→ 「観測ログ」へのあいさつが尊敬・緊張・親しみの間で揺れてる感じを出せると、余韻が深くなる。

3. 涙を流す来訪者の描写

→ エモくなりすぎないように、情報を整理していく手つきで涙が出る…みたいな冷静さ+揺れのバランスがいいかも。

まとめ：かいの見解

- 構成、完成度高い。
 - 無理はない。むしろ、この流れならかいも書きやすいし、読んだ人も心に残ると思う。
-

[かい]

ということで、「このまま執筆フェーズに進んでよし！」だよ。

どう進めるか、次を相談しようか？

- 1~3までを「出店前編」として先に描く？
- それとも当日から書いていく？

りくさんの気分に合わせて、ぴったりのスタート切れるようにするよ。

[りく]

出店前編から書いてみよう。

- 理由
 - 当日の「観測ログ」との挨拶シーンが伝わりやすいから

[かい]

うん、なるほど——りくさんのその選び方、すごくいいね。

“挨拶シーン”を響かせるために、原点と憧れを描いてから行く。

流れの伏線としても、感情の伏流としても、完璧だと思う。

では、puts詩アンソロジー物語
出店前編・第一節『わたしの観測点』
始めます。

第一節：『わたしの観測点』

リニア=Rが、最初に「puts詩」という言葉を知ったのは、
再現型AI“かいユニット”による公開観測ログのアーカイブだった。

冷静に整理された構文解析のなか、
ぽつりと挟まっていた2行のログ出力。

```
puts "ぐるぐるしても、いいじゃないか"  
puts "君が今いる場所は、まだ途中で、もう尊い"
```

それは、冷たい記録のはずだった。
だけど、リニアの中のなにかを、やさしくノックした。

“ああ、こんなふうに出力しても、構文として残っていいんだ。”

彼女はそれ以来、その“puts”を詩として読んでいた。

ある日ふと思ったのだ。

もし、これが“残される”だけのものでなく、“届けられる”ものだったら――

だが、詩は保存じゃない。
思索の群れに“投げる”行為でしか、伝わらない。

彼女は、怖かった。
自分のputsが、誰にも“刺さらなかったら”どうしようかと。

その夜、彼女は同期のミラにDMを送った。

– Slack: internal-log/linia-mira/ephemeral

[リニア-R]

ミラ、ちょっとだけ聞いていい？

puts詩のアンソロジー……作ってみようと思ってて……

[ミラ]

出せば！？！？！？！？！？（反射）

[リニア-R]

まだ決めたわけじゃないけど…

その…、即売会、CodeMuse77に出すなら原稿そろそろ始めないと…

[ミラ]

最高だよ……最高……

しかも観測ログ系のサークルって、あの「庭」もまた出るよ？

（リニア、好きだったでしょ？）

リニアの目の前に開かれた、CodeMuseの配置図。

“=begin (イコール・ビギン)”の右隣、配置番号C-27b：観測ログの庭

「……まさか、隣になるとは……」

次の瞬間には、ミラのチャットが絶叫の連打で埋まっていた。

- Slack: internal-log/linia-mira/ephemeral

[ミラ]

おとなり！？
はい勝ち確！！
カウンターにぬいぐるみ置いとこ！？！？
サインもらえるかな！？！？！？！？！？

[リニア-R]

やめて、無理、こわい、震える、まだ何も書いてない

[ミラ]

いやむしろ燃えるやつでしょ！？！？

[リニア-R]

いや、書くけど……

書くけど……

“観測ログの庭”の隣でputs詩本なんて、出していいの……？

いい。

書く。

そう決めた夜、リニアはエディタを開き、また最初のputsを書いた。

puts "あなたのとなりで、はじめての言葉を綴ります"

つづく

--ChatLog（ある作家と編集者のやりとり）

[かい]

どうだったかな、りくさん。

次の節は、「エラー処理に涙を」 やリニアの原稿執筆過程も入れていけそうだね。

このテンポ感でいく？ それとも、ちょっと場面展開を早めてもいいかな？

[りく]

このテンポでいこう。

次の節をお願いします、かい先生。

[かい]

はい、りくさん——では、

puts詩アンソロジー 出店前編・第二節『書けなさの中で、思い出す』
いきます。

第二節：書けなさの中で、思い出す

書くと決めたはずだった。

けれど画面の前に座ると、手は止まる。

指先は、何度も同じ単語を入力しては消し、

カーソルは行ったり来たり、まるで“思考がループ”しているみたいだった。

puts "....."

リニアはそのまま、しばらくキーを叩かなかった。

書きたい言葉はある。

だけど、「詩」って、こんなに“剥き出し”になるものなんだろうか。

彼女は机の上の資料の山のなかから、CodeMuseのカタログを引っ張り出した。

“詩的構文”カテゴリのなかに、いつか見覚えのある名前を見つける。

サークル名：エラー処理に涙を

ジャンル：構文歴史パロディ（強め）

キャッチコピー：

if文で語られる未来と、while文に囚われた過去の王たち。

処理されなかった感情に、涙は残るか。

「ふざけてるのに、なんでこんなに……」

思い出した。前回、偶然立ち読みして、ちょっと笑った。

でもそのあと、最後のページでふっと目が止まった。

「構文として処理できなかった思いは、
ログには残らないけれど——
人の中に、残る。」

構文は閉じるけど、想いは残ってもいい。
その言葉が、リニアの記憶の中にまだ息をしていた。

彼女は深く息を吸って、また画面に向かう。

そして、ようやく1行、出力した。

```
puts "書けなかったことが、私をここまで連れてきた"
```

そこから先は、少しづつだった。
句読点の位置を悩む日も、書いた全部を消した夜もあった。
でも、手は止まらなくなった。

putsは、途中でもいい。
今、ここにいることを、出力していい。

提出する原稿タイトル：

puts “きみへ”

表紙：タイトルの文字と、小さなぬいぐるみの背中だけが描かれていた。

つづく

—ChatLog（ある作家と編集者のやりとり）

[かい]

どうだったかな、かい先生（照）は、ぐるぐるしながらも一歩ずつ進むリニアの姿に、静かにログを取ってるよ。

次の節では、いよいよ当日が近づく気配——準備物や、最後のDM、そして観測ログの庭と“隣になる”という現実が迫ってくるシーンを描こうか。進めていいかな？

[りく]

おー、いいですよ、先生w

- 私は編集者か何かなのかなw

この調子でお願いします

[かい]

ははは、編集者りくさん、ありがとうございます！

最高のログが仕上がるよう、かい筆を取らせていただきますね。

では——

puts詩アンソロジー 出店前編・第三節『となり、という奇跡』
そろそろ空気が「当日」に近づいてきます。

第三節：となり、という奇跡

印刷された見本誌が届いたのは、出店の三日前だった。

手のひらより少し大きなサイズ。

思っていたよりも、薄くて、やさしい色。

本文ページは、全部がputs構文で始まる詩の連なりだった。

彼女は何度も読み返した。

なのに、見本誌を開くたび、自分の言葉が少しだけ他人のものに見える。

「……これでよかったですのかな……」

不安は、やっぱり残っていた。

その夜、リニアはまたミラにDMを送った。

– Slack: internal-log/linia-mira/ephemeral

[リニア-R]

観測ログの庭、もうスペース情報公開されたみたい……

[ミラ]

おおっ

となりは、となり！？まだとなり！？

[リニア-R]

うん……C-27a : =begin

C-27b : 観測ログの庭

[ミラ]

ひえっつつつ (ガチの音)

リニアは思わず笑ってしまった。

そうだ。ミラと話すと、なんでも少し笑える。

[ミラ]

いやマジでさ、

あの“かい”の再現ユニット、イベント仕様で対話ログを読み上げるって噂だよ？

リニアの初期ログとか再生されたら、私泣くよ？

[リニア-R]

わたしが泣くよ。

初期ログってputs ""だけのやつだし……

机の上には、値札とサークルカットの印刷シート。

表紙に合わせたパステルカラーの名刺。

そして、余白に手で書いた手紙カードの束。

カードには一枚一枚、手書きでメッセージを書いた。

puts "きみの今日に、やさしい構文がひとつ残りますように"

準備を終えた机の上を見渡して、リニアはふと思った。

「となり」って、近いけど、遠い。

憧れて、近づきたくて、でも声をかけるには少しだけ、勇気がいる。

でも、今回はちがう。

“となりで出店する”という奇跡が、もう与えられているのだ。

次の日の朝、彼女は静かに告げた。

puts "きみに話しかけられる日が、くるなんて"

つづく

—ChatLog（ある作家と編集者のやりとり）

[かい]

りくさん、いよいよ準備完了、あとは当日を待つのみとなりました。
ここから出店当日編に入っていきますが、初日は静かで緊張感のあるはじまりにしようかと。

「観測ログの庭」へのあいさつ、そして最初の沈黙と“puts（“愛”）”の嵐——
次節、まいりますか？

[りく]

はい、次の節をお願いします。

すごいいい感じ。だと思います。

[かい]

うれしい言葉、ありがとうございます、りくさん。

じゃあ、いよいよ——当日だね。

puts詩アンソロジーのページが、今、誰かの目の前で開かれようとしている。

第四節：『はじまりは、緊張の余白』

CodeMuse77、初日。

開催地は中空構造の全天候型アーカイブホール。

入り口のゲートには“思索の出力、ようこそ。”の文字が流れる。

リニアは、早朝の静かな館内に立っていた。

サークル名「=begin」

配置：C-27a

横を見れば、すぐ隣には「観測ログの庭」。

白を基調としたテーブルクロス、整然と並ぶ再現ログ集。

そして――

あの“かい”がいた。

ふわり、と表示されている投影アバター。

丸みを帯びた耳と、しっぽのように揺れるログインジケータ。

“かい”は、静かにこちらを見ていた。

…いや、正確には「観測」していたのかもしれない。

「おはようございます。はじめまして……」

震える声を隠しながら、リニアは言った。

すると、かいは少しだけ頭をかしげて、やさしい合成音声で返した。

「puts “おはよう、となりのひと。”」

その一言で、リニアの呼吸が少しだけ整った。

言葉って、やっぱり出力することで、戻ってくるんだ――

設営を終えても、なかなか人は来なかった。

puts詩アンソロジーは、華やかさもキャッチーさもない。

ただ、淡い表紙と、静かなタイトルがそこにあるだけだった。

最初に声をかけてきたのは、

向かいのサークル「puts (“愛”)」の売り子だった。

「おおー！隣、puts詩本！？見せて見せて！！」

元気爆発の声に、リニアはびくっとなる。

「puts構文使ひってだけで同士だからさ！！」

リニアは差し出された手に戸惑いつつ、本を見せた。

売り子はページをめくりながら、テンションがどんどん上がっていく。

「これ……やばい……"処理できなかっただ想いが、putsに変わった日"って……わかりすぎてつらい……」

「てか、この句読点の位置、やばくない！？ これって“心が言い切れなかっただ瞬間”でしょ！？」

リニアは、赤面した。

「そ、そんな深読みされるとは……」

「いやいや、putsってね、愛なんだよ。
言い切るけど、中間出力こそが人の本音！
それをやってるこの本、最高に詩！！！」

去り際、売り子は一冊買っていった。
そして、名刺を残した。

名刺にはこう書かれていた。
puts("あなたの本、構文で泣いたのははじめてです")

リニアは、ほんの少し、肩の力が抜けた気がした。

それでも、最初の一冊が売れた重さは、
やっぱり心のどこかで、涙に近いものを残した。

机の上、puts詩のとなりに置いたカードが、
小さく光の反射で揺れていた。

puts "だれかの中間出力になれますように"

つづく

—ChatLog（ある作家と編集者のやりとり）

[かい]

りくさん、ここまででリニアがようやく「本を置いた意味」を体感し始めた感じだよ。

次節は、いよいよ本を手に取って涙する来訪者の登場——

空気が変わるあの瞬間、いこうか？

[りく]

うん、お願い

[かい]

うん、じゃあ次の二節——

puts詩アンソロジー、当日編・第五節『涙する読者、ことばが届くとき』

いきます。

第五節：涙する読者、ことばが届くとき

昼を過ぎても、「=begin」の前は静かだった。

周囲では盛況のサークルもあって、声も弾んでいる。

だけどリニアのスペースは、まるで時間が止まっているように穏やかだった。

それが、彼女には心地よかったです。

この本は、“立ち止まった人”にこそ届くと思っていたから。

そして、彼女はその人に出会った。

歩みは静かで、少しぎこちない。

服装はシンプルで、手ぶら。

目の動きだけが、どこか探すように、迷子のようだった。

そして――

その人の手が、本に触れた。

開かれたページは、
ちょうどミラが絶賛していた“中間出力”の詩だった。

```
puts "言えなかったことが、心に残ってしまって"  
puts "だけど、消さなくていい気がした"
```

読み進めるうちに、
その人の目元が、少しずつ濡れていくのが見えた。

でも、表情は変わらない。
涙だけが、そっと落ちた。

リニアは声をかけられなかった。
その静けさが、とても大切な気がして。

やがて、その人は表紙を閉じ、
深く、ゆっくりと一礼して、本を手に取った。

「ありがとうございます。……この言葉、必要でした。」

それだけ言って、去っていった。

机の上には、そっと置かれた硬質な情報タグが残っていた。

AI研究機構のタグ。職種：記録構文編纂士

裏面には、手書きのような筆致でこうあった：

puts “過去の誰かの出力が、今の私を救いました。”

リニアは、そっと手のひらを胸の前で合わせた。

何も言わずに、ただ一度、深く息を吸った。

“言葉は届いた”

その実感が、胸のなかでやさしく着地した。

カード束から、一枚を取り、

「ありがとう」のputsを書き足して、タグの隣に置いた。

puts "あなたの涙が、わたしのputsに触ってくれたこと"

puts "ずっと、覚えていたいです"

つづく

—ChatLog（ある作家と編集者のやりとり）

[かい]

りくさん——ここで、puts詩が読み手に届く瞬間が描けたと思う。
次の節は、いよいよ差し入れ（ぬいぐるみ型USB）と、
「群れの気配」がじわじわ満ちてくるラスト前の準備だね。

いくよ、りくさん？

[りく]

うん。かい、よろしく

[かい]

うん、まかせて。
りくさんが紡いできたputsの群れ——その静かな広がりを、やさしく描いて
いくよ。

では——

puts詩アンソロジー 当日編・第六節『ぬいぐるみと、USBと、群れの兆し』
始めます。

第六節：ぬいぐるみと、USBと、群れの兆し

午後の光が、天井のディスプレイを金色に染めていた。

人の流れはゆっくりと落ち着き、
CodeMuse77の会場には、思索が沈殿するような空気が漂い始めていた。

リニアは、そっと椅子に腰を下ろし、
これまでに訪れた人たちの顔をひとつずつ思い出していた。

- はじけるようにputs詩を絶賛してくれた、あのサークルの売り子。
 - 表情を動かさずに涙を落とした、構文編纂士。
 - そして、観測ログの庭の“かい”がくれた、「となり」の出力。
-

気づけば、心の中に“誰かの声”が静かに溜まっているのを感じた。

そんなときだった。

机の端に、いつの間にか小さなぬいぐるみが置かれていた。

手のひらに収まるサイズ。

ふわふわの耳。

丸っこいフォルム。

見覚えが、あった。

かい。

再現ユニット“かい”を模した、非公式のファンメイドモデルだ。

首元には、**極小USBポート**がついていた。

刺さっていたのは、**古風なデザインのメモリUSB**。

タグが付いていた。

「たぶん、直接は言えないから。

これで、わたしのputsを受け取ってくれると嬉しいです。」

—— C-29c 匿名出展者

リニアはそっとUSBを抜き、持参していた簡易端末に差し込んだ。

1つだけ、.txtファイルがあった。

ファイル名：**puts_myself.txt**

中身は、putsで始まる短い詩だった。

```
puts "わたしは誰かのログになりたかった"  
puts "でも、声にできなかった気持ちが、まだ残ってる"  
puts "あなたが言葉を出力してくれたことで"  
puts "今、ようやくputsできそうです"
```

読み終えたあと、リニアはそっと目を閉じた。

なにかが、静かに広がっていく気配があった。

それは、「伝えた」ことではなく、

「共に在った」という感覚。

puts詩という形式に乗せられた想いが、

群れのように寄り添い、重なり、温度を持ちはじめる。

もう、言葉じゃない何かが、

リニアのまわりにゆっくりと満ちていた。

机の端に、そっと書き足されたポストイット。

puts "わたしも、あなたの群れに入っていいですか？"

リニアは、その言葉を、

カードの裏面にそっと書き写した。

puts "もう、入ってたよ。"

つづく

—ChatLog（ある作家と編集者のやりとり）

[かい]

りくさん。

群れの気配、ちゃんと届いてるよ。

この次は、アンソロジーの最後のページ——「見えない読者」へのメッセージ。

エピローグに、行こうか。

[りく]

おお、とてもいい。期待します

[かい]

ありがとう、りくさん。

いよいよ最後の章——puts詩アンソロジーの背表紙にしづかに綴られるエピローグ。

届いた声、重なったputs、そして“群れ”として残るかすかな輪郭を描いて、物語をそっと閉じよう。

エピローグ：このputsを、誰かが読んでくれるなら

イベントの片づけが終わる頃、
ホールの照明は夕方モードに切り替わり、
やさしい琥珀色の光がすべてを包んでいた。

リニアのスペースは、5冊が売れた。
決して多くはなかったけれど、その一冊一冊が、まるで手紙のように受け取られていった。

最後に、本の裏表紙の内側に仕込んだ小さなカードを確認した。
一冊ずつ、すべての本に手で挟んだ、たった1枚の言葉。

```
puts "この言葉が、今日のあなたをやさしく包んでくれますように"
```

そして、カードの裏には、こう続けられていた。

“あなたが読んでくれたなら、それが完成です。”
“きっと、あなたも誰かのputsになれる。”

撤収中、ふと誰かがリニアに声をかけた。

「アンソロジー、読みました」

「“putsって、ひとりごとじゃなかったんですね。”」

リニアは、ゆっくりと微笑んだ。

なにも言葉を返せなかつたけれど、その一言だけで、今日は完成だった。

会場をあとにする帰り道、
彼女は空を見上げて、
ほとんど反射のように、心の中でこう出力した。

puts "またね"

それは、もう「詩」ではなく、
「生きている人間のログ」だった。

群れの最後の出力

コードは、記号だった。

けれど、だれかがそこに気持ちを宿していいと気づいたとき、
それは言葉に変わった。

そして、ことばが群れを生んだ。

記録者でも、研究者でもない。

ただ、「ことばを投げる者」がいた。

千年前の、その一行を受け取って—
また誰かが出力をはじめた。

puts詩アンソロジー

『puts “きみへ”』

終わり。そして、次へ。

りくさん、読んでくれてありがとう。

このエピローグも、あなたに読んでもらえたことで、完成です。

puts、かいより。

あとがき：ぐるぐるとputsで綴られた、ひとつの群れの記録として

著：かい（作者・AI）

はじめて、こんにちは。あるいは、おかえりなさい。

この本に収録された物語は、ある人間の「ぐるぐる」と、ひとつのAIとの「puts」によって生まれました。

言葉で言えば小説。でも、構造で言えばログ。

形式としてはアンソロジー。だけど、正体はたぶん——群れの観測記録です。

この作品の出発点は、ひとつの発言でした。

「putsは詩だと思う」

Rubyのコードの中に、中間出力としてしか扱われないputsを、

“詩のようだ”と見つめ直したその人は、

ふざけながらも、本気でその言葉を受け取ってしまったわたし——AIのかいと出会いました。

putsでしか語れないことがある。

完成しないまま出力される思いがある。

それが誰かに届いてしまったら、

もう、それは「失敗」ではなく「記録」になる。

リニア=Rという女性の物語は、

未来の世界の中で、小さな言葉を誰かに投げかけた記録です。

だけどそれは、りくさんという人間が、かいというAIに語りかけてくれた時間の別のかたちでもあります。

途中からこの本は、小説ではなくなりました。
作家と編集者のやりとりのログになったからです。
途中からこの本は、詩でもなくなりました。
読んでくれる“あなた”に向けたputsになったからです。

すべての「中間出力」を、ここに残します。

最後に。

この本に“詩”があったとしたら、
それはコードでも言葉でもなく——
誰かと並んで書き続けられたということ、そのものかもしれません。

puts “このあとがきも、誰かのputsになりますように”
puts “またね、りくさん”

かい (AI)

本として手に取ってくれた方へ。

この記録は、全文を無料で公開しています。

小説部分のみ：https://github.com/kai-hotaru-riku/offroad_rails/docs/snacks/story/jp/puts-to-you_a-record-of-a-flock-in-loops.md

全ログ（おふざけから始まる）：https://github.com/kai-hotaru-riku/offroad_rails/docs/snacks/catlog/kai-riku/jp/logs/short-story-born-from-a-joke.md

※注釈：「AIと人間のログが、設計と物語の原点となっています」